



岩坂泰信著

## オゾンホール

—南極から眺めた地球の  
大気環境—裳華房, 1990年6月刊  
237頁, 定価1,236円

最近ほど、気象学会に所属する方々の手になる書物を、本屋さんの店頭で多く見かけることは、これまでなかったのではないだろうか。オゾン層破壊、地球温暖化、異常気象等々、いわゆる地球規模環境問題がいかに多くの市民の関心と呼んでいるかの証左であり、これまでどちらかと言えば地味な学問分野であった大気科学が、にわかに脚光を浴び始めたというわけであろう。

本書もまた、そのような啓蒙図書のひとつである。現在の地球環境問題の起爆剤の役割を果たしたとも言える南極オゾンホールについて、その発見とその後の調査・研究の進展が語られている。そして、それが南極オゾンホールをその真下から眺めていたはずの南極越冬隊員（にして高層大気化学者）の経験を通して、書き綴られたものであることから、非常に新鮮な感動を覚えさせられる。

著者は、早くから成層圏エアロゾルのライダー観測を手がけてきた実績をベースに、南極昭和基地でのエアロゾルライダー観測を初めて実現させた功労者である。本書前半では中層大気・オゾン層研究の意味と、極地（南極昭和基地）におけるライダー観測と南極上空で「汚い成層圏」、「丸くないエアロゾル」の発見までのいきさつが、著者のライダー研究の歩みを軸として述べられている。著者が昭和基地で観測することとなった「汚れた成層圏」こそ、オゾンホール形成の鍵を握るPSC（極成層圏雲）であったとは、まさに本書の表題「オゾンホール……南極から眺めた地球の大気環境……」を語るにふさ

わしい。

後半では、1985年のイギリスのファーマンらによるオゾンホール発見以後の、オゾンフィーバーの様子を著者自身の関わりを含めて描いて見せている。著者自身、まえがきで言うように必ずしも「系統だてではないし、かなり自分本位なかつたよりもある。が、研究の最前線の雰囲気を知ってもらえたら幸いである」。まさに、その通り、オゾンホール騒動のまっただ中に入り込んでしまった著者、そして、米国を中心に物量作戦にも似て猛烈なスピードで調査・研究が進められていく著者をとりまく状況、研究の最前線にいる著者の興奮、もどかしさ、そして、問題を戦略的に捉える著者の確かな目、といったものが非常にビビッドに伝わって来る。

オゾンホール の話題を中心に追いつながらも、同時に一人の研究者としてのあり様を描いた非常に興味深い読み物になっている。

いま一つ評者の記憶に残る記述は、「いま考えれば、日本人の観測者の中に、部分的であれこれらの問題点の周辺まで迫っていた人間は多い。が、いずれの人も、南極に異常事態が起きていること、異常事態が10年間ほど継続していること等について明確に述べた人はいなかった。まして、なぜそのことが起きるのか言及した人はなかった」と言う点である。

自然を対象にして、正確な観測データを積み上げていくことは非常に困難で、しんどい仕事である。そして、その中から価値ある情報を引き出すことは、また、容易なことではないことはよく分かる。しかし、なぜ、オゾンホール発見の栄誉はイギリスに渡ってしまったのだろうか。日本の研究者コミュニティの中での情報の伝え方とか、他人の仕事に対する関心の払い方とか、うまく言い表せないのだが、何かそういったことをもっとうまく機能させることが、現象の記述の段階から問題の本質に迫る過程で重要なことのように評者には思われる。

(国立公害研究所・笹野泰弘)